

教材発掘 壬生忠見殺人事件

ーテキストは嘘をつくー

金子 直樹

国語科、とくに古典学習におけるアクティブ・ラーニングとは、パフォーマンス・ラーニングではない。話し合いや発表会という「活動」を伴っていないとしても、生徒たちが向き合うテキストを、ただの対象物（しかも時代の離れた、縁遠い興味しか持てないもの）としてではなく、意図を持って私たちに「嘘」を語りかけてくるものとして捉え直すことで、テキストとの関係に主体性と能動性をもたらすことが重要である。特に中学生段階では、高等学校での本格的な古典学習を迎える準備として、そのような構えを育てておきたい。以下に、テキストの「嘘」を素材としての単元構成・教材編成と、その実践・改善例とを提案する。

1. 始まりは『百人一首一夕話』

(1) 課題の発見

小倉百人一首のうち、

「しのぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人のとふまで」平兼盛

「恋すてふわが名はまだき立ちにけり人しれずこそ思ひそめしか」壬生忠見

この二首は中学生にも親しみやすい歌でもあるが、天徳四年(960)内裏歌合で競われた逸話も興味深い。歌人の馬場あき子氏は『歌説話の世界』(講談社 2006)で、

「問題はむしろ、歌説話として、壬生忠見がこの負歌に絶望して不食の病となり、死に至ったというところにある。『沙石集』という無住(鎌倉中期の禅僧)の編んだ仏教説話集の中に「歌ゆゑに命をうしなふ事」という一文があり、ここでは兼盛が忠見の重病を見舞ったと伝えられている。『沙石集』が弘安六年(1283)頃まで執筆されていたとすれば、天徳四年から何と323年もの伝承期間をもっていたわけである。」(「(一)月雪花の時」と言及している。

この説話に関して『新編日本古典文学全集 沙石集』(小学館 2001)の頭注には「本話は『沙石集』以前に所見がなく、無住の創作の可能性も考えられる。前話の長能致死説話からの発想か」とあり、「壬生忠見が歌合で負けたことが原因で不食の病となり死に至った」というエピソードは後世の(おそらくは無住による)、「執心こそよしなけれども、道を執する習ひ、げにも覚えてあはれなり」という意図に依った「創作」であろう。この「創作」がどのようになされていったのか=テキストがどのような「意図」でどのように「改変」されていったのかという過程を読み解く(中学生としては、その過程を追体験すること)は、テキストとの向き合い方、古典の読み方を育成する契機になると考える。

(2) 課題解決の糸口となる教材

江戸時代の国学者・歌人である尾崎雅嘉の『百人一首一夕話』は、和歌の評釈と作者の逸話を江戸期の平易な古文で記した読みやすいテキストである。当校では中学生用に『百人一首一夕話』の和歌評釈部分を「古文で古文(和歌)の意味を理解する」教材として用いているが、その後続く作者逸話部分の壬生忠見の条には、

「その後、忠見はこの歌合に負けたることをもの憂く思ひ、胸ふたがりて不食の病を生じたりけるが、すでに頼み少なくなりたるよしを兼盛聞きて訪ひに行かれければ、忠見対面して『わがいたはりは余の病には候はず。御歌合の時、秀歌詠みたると思ひはべりしに、そこの詠み給ひし、ものや思ふと人の問ふまでといふ歌に負けはべりしより胸ふたがりて、かかる重病になりはべりぬ』と申されしが、つひにこの病によりてむなしくなられたりと言へり。この事は『沙石集』に出でたれど、『家集』を考ふればその後もながらへられたるやうに見ゆれば、その実否は確かに知られず」(下線は引用者)という記述がある。

テキストを表面的に読み進めるだけでなく、テキストの「改変」から筆者の「意図」を見抜くという二重構造になった学習活動を行う場合には、それを考える手立てとしての教材編成、生徒が直接向き合うテキストに何をどのように用いるのかという仕掛けが重要である。中学生相手の授業に全集本「頭注」をそのまま用いるわけにもゆかないが、百人一首の学習でなじんでいる『百人一首一夕話』からの「これは何を言っているの?」という問いかけであれば、導入もスムーズで困難感も薄い。『百人一首一夕話』からこの記述を見つけ出したことが、本単元の教材編成を思いついたきっかけである。

2. 「壬生忠見殺人事件」の教材編成

(1) 導入として、『百人一首一夕話』から平兼盛と壬生忠見の逸話部分と、前出『歌説話の世界』から該当部

分を、それぞれ B4 1 枚ずつ。特に『歌説話の世界』は、馬場あき子氏の練達の筆で「歌合」の背景も含めて記されており、話題全体への理解を助けるものである。

この導入で、『百人一首一夕話』で尾崎雅嘉が指摘したように、壬生忠見は歌合で平兼盛に負けたことが原因で死んだというのが事実でないとする、なぜそのような逸話が生じたのか。比喩的に言うと、「誰がなぜ壬生忠見を殺したのか」について考える」という学習目標を明示する。

(2) 問題の提示として、『沙石集』巻五末四「歌故に命を失ふ事」の全文を B4 1 枚。

本文前半の、藤原長能が藤原公任に歌を批判されて、「胸ふさがりて覚えける程に、やがて病つきて、つひに失せにけり。道を重くする執心にや」という説話に続き、後半に壬生忠見と平兼盛の説話が述べられているので、以降の授業では、呼称として、事件 A「長能 vs 公任」、事件 B「忠見 vs 兼盛」を用いる。

(3) 展開として、テキスト改変過程を検証する素材に、事件 A「長能 vs 公任」に関しては、

- ・『俊頼髓脳』より該当部分
- ・『袋草紙』より該当部分
- ・『十訓抄』四「人の上を誡むべきこと」17

事件 B「忠見 vs 兼盛」に関しては、

- ・『(旧版)日本古典文学大系 歌合集』(岩波書店)から、「天徳四年内裏歌合」判者藤原実頼の記録
- ・『袋草紙』より該当部分

を、それぞれ作品毎に B4 1 枚。

中学生の古典であるので、全て原文の傍らに口語訳を付したプリントを用意する。

また、テキスト間の関係を把握しやすくするために、下の表を書き込み可能なスペースを加えて B4 1 枚大で用意する。

	実頼日記 (960)	俊頼髓脳 (1110)	袋草紙 (1150)	十訓抄 (1250)	沙石集 (1280)
事件 A		○	○	○	○
事件 B	○		○		○

3. 生徒の反応—中学 2 年生の読み—

2015 年度中学 2 年生を対象に、年度末の 3 時間程度を用いて試行をした。導入から、前項に記した「教材編成」で示した順にプリントを提示し、簡単な説明を加えながら音読を行い、最後に「この問題について、あなたの考えを述べよ」として書かせた。

以下は、生徒によるまとめの文章である。

(1) 説話の理解

○事件というものは時間が経つにつれて印象が薄れて

ゆくものです。この「壬生忠見殺人事件」も同じで、語り継がれてゆくうちに記録があやふやになり、「実否は確かでは無い」という終わり方の歌論書などが出てきたのではないかと思います。そして『沙石集』の本文を見て分かるように、壬生忠見は歌に対して相当の執着心を持っています。その上、この事件のきっかけとなった彼の歌には、彼自身とても自信を持っているようでした。それで負けてしまったということは、辛くて悲しいことだろうと本文を見て思います。そして、そんな彼が悲しみで死んだといっても納得できます。その事実が時を重ねる毎にあやふやになったのだろうと、私は思いました。

○昔の書物から読み取れる限りでは、長能も忠見も歌が原因で死んでしまったようだ。歌を否定されたぐらいで病気になるというのは、普通考えれば信じられないけれど、昔の人たちは自分の和歌を磨くために自分の全てを懸けていたんだと思った。本来なら趣味のレベルであるべき和歌が、長能や忠見のように人生の全てになる。人間の執着心は胸を打つものであると同時に、人生を変える恐ろしいものにもなる。忠見の歌合での出来事を「殺人事件」とするならば、犯人は判者である天皇でも、兼盛でもなく、忠見自身の執着心が彼に与えた絶望感であるべきだと思った。

(2) 説話の分析

○私は、『沙石集』における壬生忠見の死亡は、長能の話と混せて『沙石集』の作者が書いてしまったのではないかと思った。理由は、天徳歌合の当時の記録にも、150 年後の記録にも、「死んだ」とは書かれていないのに、320 年後の記録にいきなり出てきているから。また、「一夕話」に、「死んだとされている年よりも後に作った和歌が家集に残っている」と書いてあることから、そう思った。壬生忠見を『沙石集』の作者が「死んだ」としたのは、事件 A の「道を重くする執心にや」と対照的に、事件 B で「執心こそよしなけれども、道を執する習ひ、げにも覚えてあはれなり」と書いて、仏道に入る人は仏道に専念しなければならないけれど、他の道に入った人を尊重することもしなければならないと、伝えたかったのではと思った。

○事件 A ではほぼ一貫して同じような流れの話が続いている。最後の話のまとめ方に変化があっても、四つとも、歌の勝負に執着した長能の様子が描かれている。事件 B では当時の記録と『袋草紙』には忠見が勝負に負けたとは書いてあっても、その後のことには触れていない。ところが『沙石集』では事件 A と同じような展開になっている。事件 A の一連の流れより、歌に執着しすぎて人が亡くなってしまうことは、あるのではないか。しかし、事件 B では三つを比べると、忠見も同じように歌に執着して亡くなったというのは、後付けされた話ではないか

と思った。

(3) テキストの考察

○記録が多く残っている事件Aに注目しました。すると『俊頼髓脳』『袋草紙』『十訓抄』は歌に執着していることではなく、安易にそういう人を批判することを悪として、『沙石集』では執着していることを悪として、主旨が異なるように思った。これは、歌論書は和歌の本質や手法などを解説するもので、あくまで歌人に対してプラス思考であることと、仏教説話は仏教の思想や信仰について追求したのだから、現実世界への未練(＝執着)を良しとしないのが原因だと思った。これから、話が盛られたり、変えられたりするの、その本の目的に合わせて都合良く変えているからだと考えた。

○事件Aに注目してみると、『俊頼髓脳』『袋草紙』『十訓抄』の三作品では、歌に執着している長能をうっかり批判してしまった公任を悪く書いているが、仏教説話である『沙石集』では歌に執着している長能を悪く書いている。このことから、著者の都合に応じて少しずつ現実を変化させ書かれていると分かる。『沙石集』を書いた人は、仏教説話として成り立たせるために、話を盛っていたのだろう。

(1)「説話の理解」例のように、忠見の和歌への執着を思いやるという方向で理解した者、(2)「説話の分析」例のように、テキスト改変の過程を理解した者、(3)「テキストの考察」例のように、改変の意図にまで言及した者が、それぞれ1/3程度であった。音読と簡単な説明だけの、ほとんど生徒に投げっぱなしの授業であるが、問題設定と教材編成の魅力が生徒を引っ張ったのであろう、中学2年生としては上出来である。

その中に一件だけ、次のようなものがあった。

○事件Bの方は、それぞれの本において内容が変更されている点が複数あった。これらは、「兼方の悪口」の「兼方」が「兼久」になったような単なる伝え間違いではなく、著者が伝えたい事に合わせるために、著者の都合で勝手に変更したのだと思う。例えば歌論書である『袋草紙』では、実頼の記録がほぼ形を変えずに引用されているが、仏教説話集である『沙石集』では忠見の心情が和歌によって揺れ動く描写が追加されている。さらに事件Aにおいては、話の内容は全てを通して大差ないものの、歌論書の『俊頼髓脳』『袋草紙』では「かばかり思ふばかりの人の歌などは難ずまじき」「執する人の事、荒涼に難ずべからざるか」と、歌の批評をする場合の注意が、教訓説話集である『十訓抄』では「さばかり慮ある身にて、なにとなく口疾く難ぜられたりける、いと不便なりしか」と、気安い発言が災いを呼ぶことが、「仏教説話集」である『沙石集』では「道を重くする執心に

や」と執心への戒めの言葉が、それぞれ追加されていて、著者の言いたいことに合わせて解釈が変えられている。これらのことから、『沙石集』を始めとする書物においては、出来事の本質はさほど重要ではなく、自分の言いたいことが第一優先であり、出来事はそれを裏付けるための道具であると考えた。よって、『沙石集』においては、著者が執心を戒めたかったので、忠見は「死ん」なのであり、忠見を殺したのは『沙石集』の著者の無住だと思ふ。

この生徒は、国語に限らず極めて優秀な生徒である。文中で言及している「兼方の悪口」云々は、秦兼方(兼久)と藤原道俊との諍いの説話を、『宇治拾遺物語』と『今物語』とで比べ読みして筆者の意図を探るという2学期に実施した授業をふまえたものである(「兼方の悪口」授業原案は2008年3月刊の当校「中等教育研究紀要第48巻」に発表、改善案は2015年11月実施の当校「第45回公開研究会」で実施した)。このまとめの文章では、既習の「説話の比べ読み」の方法を自力で応用したわけである。授業でのねらいをはるかに越えた優秀なまとめであり、読んだ時には「ここまで書いて頂いなくても」と、申し訳なさに思わず赤面したほどであるが、正気に返って考えてみると、この生徒が「自力で応用力を発揮した」テキスト分析と考察の手だてを、順を追って与えれば、他の生徒にも到達可能なものになるのではないかとすることに気付いた。

4. 単元の改善

(1) 方法への習熟

2017年度中学3年生では、週1時間の授業を「説話を読む」時間として、主に『今昔物語集』を読み進めていった(単元構成の原案は、2014年3月刊の当校「中等教育研究紀要第54巻」に発表)。この学年は初めて授業をする生徒たちであったので、2学期には同種説話の比べ読みを重ね、方法に習熟させていった。

①『今昔物語集』30・10「下野国に住みて、妻を去りて後返り棲む事」と『大和物語』157「馬槽」

②『今昔物語集』30・12「丹波国に棲む者の妻、和歌を詠む事」と『大和物語』158「鹿鳴く声」

③『今昔物語集』30・5「身貧しき男の去りたる妻、摂津守の妻になりたる事」と『大和物語』148「葦刈」

まず、①・②に関しては、『今昔物語集』と『大和物語』と、どちらの書きぶりを良しとするかについて書かせた。以下はその例である。

○『大和物語』の書きぶりをよしとする意見

『大和物語』と『今昔物語集』の大きな違いは、その

話の長さや設定の細かさにあると思う。どちらの話においても『今昔物語集』の方が話が長く、また人物の説明や会話も多くなっているということが言える。設定も多少違う。『大和物語』の「鹿鳴く声」には「壁を隔てて据ゑて」とあるが、『今昔物語集』の「丹波国に棲む者の妻、和歌を読むこと」では「家を並べてなむ住みける」とある。また『今昔物語集』には妻が田舎者であることを苦々しく思ったということや、鹿の肉がおいしいという『大和物語』に書かれていないことが描かれている。これらのことから、『今昔物語集』は『大和物語』の内容をふくらませたものであるということが分かる。

しかし、メインはあくまでも元の和歌なのではないだろうか。話を盛ってストーリー性を重視した『今昔物語集』よりも、和歌にそつと話を添えたような『大和物語』の方が、和歌が引き立っていると思う。よって、私は『大和物語』の方が良いと思う。

○『今昔物語集』の書きぶりをよしとする意見

私は『大和物語』より『今昔物語集』の書きぶりの方が良いと思った。まず『今昔物語集』の方が説明が多く、場面を想像しやすいので、内容が深いと思った。また、私は和歌には人の心を変える力があるということ、和歌を通すことで願いが叶うというようなことを、より強調しているように感じた。例えば『大和物語』の出だしは「大和国に男女ありけり」だが、『今昔物語集』では「今は昔、丹波国に住む者あり。田舎人なれども心に情ある者なりけり。」とある。この違いから私は、田舎人も和歌ができる人がいるから、あなどってはいけない、すなわち和歌ってこんなにすごいんだよと、和歌自体のすごさをより表している気がした。他に、登場人物をより具体的に説明していたりという違いがあるが、これらのような内容の濃さの違いは、『今昔物語集』が後に作られたからだとは私は思った。時代が進むことで、文字が読める人も増え、さらには内容をより具体的にしよう、この部分は面白味に欠けるからこうしたらどうだろうと、一層内容が色濃くなっていき、『今昔物語集』に至ったのではと考えた。私は、このように、和歌のすごさや内容の豊かさなどが『今昔物語集』の方から感じられたので、『今昔物語集』の書きぶりをよしとする。

(2) 方法の意識化

③では、『今昔物語集』と『大和物語』を、

「発端：男と女との人物設定と別離まで」

「展開：女が「ある人」の北の方になってから、難波で男と再会するまで」

「発展：難波での再会と、歌のやりとり」

「終結：説話の結び」

の4場面に分けて対比の要点や気づきを記入するシートを、各個人作業で作成し、グループで確認させた。

(3) 古文で読むことの意識化

①②のまとめ(成果)からの気づきとして、生徒たちは「比較・分析」という方法に習熟はするものの、それを「現代語」によって行う、ということがある。もちろん中学生は本格的な古典学習を行っておらず、教材(プリント)にも原文の傍らに全文口語訳を付しているのに、生徒たちにとっては自然な表現(成果の表出)であろう。前述「3 生徒の反応—中学2年生の読み—」で「上出来」と評したのも、中学2年生であれば言語抵抗を越えてよく消化したものと認められる。しかし中学3年生として次のレベルで読む場合には、心情表現や和歌の言葉など、古文でしか表せない古典は、古文による表現を抜きにしては本当に理解したことにはならない。理解に便宜だからといって古典を「現代語」に置き換える癖をつけるのは、愚かなことである。

そこで、特に「本文の表現の比較」を行う場合には、「本文での表現をそのまま用いること」を求めた。以下はその例である。

○『大和物語』と『今昔物語集』は、どちらも貧しい暮らしを改善するために別れた夫婦が、夫はより貧しく、妻は裕福になって再会するが、和歌を送り合っただけで終わってしまうという出来事を書いている。しかし、この二つではこの出来事をどう捉えたかが大きく違う。『大和物語』では、妻が「風など吹けるに、かの津の国を思ひやりて、いかであらむなど悲しくて詠みける。ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の荻ぞ答ふる」と、上京しても元の夫を忘れられなくて、「いかで難波に祓へしがてらまからむ」「そこにはなものし給ひそ」と新しい夫に嘘をついてまで会いに行くが、夫がもっと貧しくなっていたと、悲しい話として書いている。

しかし『今昔物語集』では、「ただ前の世の報なれば」と考えている妻に反して、「もし共にあるが悪しきか」と考えた夫が妻と別れたら、妻は裕福になったが夫は「その後はいよいよ身つたなくのみなり増さり」で、妻と再会しても歌を送って「葦荻らずして走り隠れにけり」と終わっている。ここまでなら悲しい話だが、この話の終わりは「皆前の世の報にてある故を知らずして、おろかに身を恨むるなり」となっている。つまり、これは「悲しい話」じゃなくて、人が幸せかどうかはその人の運ではなく、前世での行いの報いだという道理を知らず、甘い考えで別居した男に対する批判を書いたものと考えられる。その仏教の考えがあるかないかが、この二つの話の大きな違いだと思った。

5. 生徒の到達度—中学3年生の読み—

以上のようなトレーニングを経て、3学期に「壬生忠

見殺人事件」単元を実施した。要点を簡潔に示すと以下の通りである。

「研究課題」：「壬生忠見は歌合で平兼盛に負けたことが原因で死んだのが事実でないとする、なぜそのような逸話が生じたのか、比喩的に言うと、誰がなぜ壬生忠見を殺したのかについて、考える。」

「学習活動1」：「事件A・事件Bの概要をまとめる。それぞれの事件がどのように語り継がれてきたのかを、時間軸に沿って整理する。その際に、証拠物件を大切に扱う。本文の表現や記述に具体的にふれながら、分かりやすく整理する。」個人作業、シートへの記入。

「学習活動2」：「証拠(証人)の信憑性を評価する。それぞれのテキストを比較して、テーマや語り方の特徴を整理する。」個人作業、シートへの記入。

「学習活動3」：「互いの読みを共有する。活動1・2の成果をグループで閲覧し、自分が気付いていなかったポイントの指摘、注目すべき見解、参考になった意見などをまとめる。」話し合い、シートへの記入。

「学習活動4」：「捜査報告書の作成。自分の意見を文章にまとめる。記述の内容については、壬生忠見殺人事件の犯人は誰かを指摘する方向でも、各テキスト間の異同をどのように考えるのかをまとめる方向でも、どちらで記述してもよい。記述の方法については、2学期実施の『今昔物語集』と『大和物語』との比較分析の際に学んだ手法を活用して、本文の表現や記述に具体的にふれながら、分かりやすく説明する。」まとめ。

以下は、生徒によるまとめの文章である。

(1) 各テキスト間の異同を考察する例

○私は『沙石集』と他の四つのテキストにいくつかの違いがあることが分かった。長能と公任の事件では、説話の内容はほぼ一致するが、筆者の説話に対する考え方が違う。前3つのテキストでは「かばかり思ふばかりの人の歌などは、おぼつかなきことありとも、難ずまじき料に」、「執する人の事、荒涼に難ずべからざるか」、「口疾く難ぜられたりける、いと不便なりしか」と捉え、長能が死んだ原因が公任の一言だとされている。それに対して『沙石集』では「道を重くする執心にや」とあり、死んだ原因は長能本人の執着心となっている。

忠見と兼盛の事件では、「実頼日記」と『袋草紙』では判者の目線で書かれているのに対し、『沙石集』ではこの事件を第三者的な目線で描いている。また、前2つでは「暫く持に疑ふ。但し左歌甚だ好し」などとどちらも素晴らしい歌だという評価で終わっているが、『沙石集』では後に負けたことが原因で忠見が死んでいる。これについて「執心こそよしなけれども、道を執する習ひ、げにも覚えて、あはれなり」とまとめられている。これらのことから、前4つのテキストと比べて『沙石集』

は「道を重く執すること」について書かれたのだと言える。筆者の無住が僧侶だったということと、「執心」についての筆者の考えから、私は『沙石集』は前4つとは違い、仏教を広めるために書かれたもので、無住は「悟りを開くために執心はいらないことだが、命を失うほどに何かに執着することは仏を一生かけて信仰することと同じで大切だ」と言いたいのではないかと考えた。

(2) 『沙石集』筆者無住を「犯人」と指摘する例

○壬生忠見が歌合で負けたことが原因で死んだ、という記述がなされるのは、『沙石集』だけである。当日に書くであろう日記(実頼日記)に忠見が死んだことが書かれていないのは当然のことだが、190年後に書かれた『袋草紙』にも歌合で負けて病気になる死んだとは書かれていない。よって、忠見が歌合で死んだという出来事は事実ではなく思える。では、なぜ忠見は『沙石集』で死んだのだろうか。『沙石集』では「歌故に命を失ふこと」という同じ題でもう一つ長能と公任の事件が入っているが、私は『沙石集』の作者がこの二つの事件を知り、故意に混合させたのではないと思う。その根拠としては、二つのことが挙げられる。一つ目は、忠見と長能の病床生活や死に関する描写が似ていることだ。例えば二人の病床の様子を比べると、長能の方は順に「心憂きことかなと承りしに、病になりて、その後、いかにも物の食はれ侍らざりしより、身、かくまかりなりて侍るなり」、「心憂く思ひ給へてこれを嘆く間、不食になりてすでに今日明日か罷らん」、「心憂きことかなと承りしが、病となりて、その後、物食はれ侍らざりしより、かくなりて侍るなり」、「胸ふさがりて覚えける程に、やがて病つきて」とあり、忠見の方は「心憂く覚えて、胸ふさがりて、それより不食の病付きて、頼みなきよし聞こえて」とある。4つの文章それぞれにある長能の病に関する記述と、『沙石集』の忠見の描写は完全にコンプリートしている。私としては、作者が長能に関する描写をまねたように思える。二つ目は、証拠物件ではないが、馬場あき子氏の文中の「兼盛が見舞いに行くはずはない」という部分だ。『袋草紙』にもあるように、身分差が激しいこの時代に、地位の高い兼盛が地位の低い忠見の所にわざわざ見舞いに来るとは考えにくい。これらのことから、『沙石集』の作者である無住が忠見を殺したと考える。ただ無住は面白半分には忠見を殺したのではなく、『今昔物語集』などと同じように読者にとって親しみやすく面白い文章にしようとしたのだろう。

○「壬生忠見殺人事件」の犯人は『沙石集』を書いた無住だと思います。無住は、事件A Bを「歌故に命を失ふ事」というくくりで書いているので、BだけでなくAの話も知っていたということになります。まず事件Aの流れを整理すると、公任の家(花山院の歌合の可能性も)

で「三月尽の夜」に長能の詠んだ歌に対して、公任が「春は三十日や(は)ある」と指摘します。そしてそれによって長能は「病気になり死んだ」という話です。これについて証拠物件では「執する人」には「難ずまじき」というような意見でほぼ一致しています。また、この話は長い間に渡って書物に登場するため、有名な話だと思われます。一方で事件Bについてですが、まず証拠物件の信憑性について考えると、「実頼日記」は日記なので事実の可能性が高く、『袋草紙』は和歌のエピソード重視なので話の改変がなされた可能性は低いです。しかし『沙石集』は仏教説話で「エピソード<教訓」なので、話が改変された可能性があります。また、古い順に「実頼日記」『袋草紙』では「天気もしくは右にあるか」ということで「右兼盛」が勝ち、新しい『沙石集』では「天気左にあり」と「左兼盛」が勝つという矛盾があります。また、長能と忠見の死に際を比べると、「胸ふさがりて→不食の病→かぎり・万死一生のよしを聞き→訪ひて→病による死」と、非常に似ています。結論としては、説話を書く時に、無住が有名な話で「歌に執着する人」が「病になり死んだ」例として、長能だけでは物足りなかったのを、話を改変して忠見を(話の中で)殺して事件Bとしたのだと思います。

(3) テキストの持つ虚構性を指摘する例

○僕は、壬生忠見を殺したのは、古典の話の在り方であると考え。今までに学習してきた『今昔物語集』においても、教訓的な内容に仕上げるためにしばしば「それは無いだろう」と思ってしまうような誇張した表現や内容が出てきた。壬生忠見が歌の勝負に負けて結局死んでしまうというのは、その中の一つであると思うのである。事実、「壬生忠見殺人事件」によく似た事例として、長能が公任に歌の内容を指摘されて最後には死んでしまうという話があったが、そこでも例えば『俊頼髓脳』であれば「かばかり思ふばかりの人の歌などは、おぼつかなきことありとも、難ずまじき料に」、『袋草紙』であれば「執する人の事、荒涼に難ずべからざるか」などというように教訓が示されている。しかしながらここで疑問が生じる。それは、壬生忠見の話においては歌合のあった960年から190年も経った『袋草紙』においても教訓的な内容が登場しておらず、勝負に関する考察、つまり話の元ネタについての検証が行われているのはなぜか、ということだ。もちろん『袋草紙』が書かれた時代には忠見は既に死んでおり、長能の話のように教訓的な話に変化していたとしてもおかしくはない。それにも関わらず、故老の証言まで引っ張り出して真相を探ろうとしているのはなぜなのか。これについて僕は、忠見と兼盛の歌が本当に素晴らしくて、教訓的な話というよりも芸術的な話であり、語り手がちゃんと事実として伝えていっ

たからではないかと思う。最後には『沙石集』で内容が変わってしまっているが、それもどちらかというところから「道」を執する習ひ、げにも覚えてあはれなり」という感激した気持ちが表現されているため、長能の話とはまた違った扱いである。古典の話は教訓がついているから価値があるように感じていたが、忠見の話については、そもそも価値のあるものだったのではないかと。

○壬生忠見はなぜ病気によって死んでしまったことになってしまったのか。「実頼日記」では歌の決着をつけた後のことは記されていない。兼盛の歌を勝ちとしたことと、「思ふ所有り。暫くは持に疑ふ」という忠見の歌もすばらしかったことから、実頼の引き分けだったのかという自身の考えだけが記されていた。また『袋草紙』にはこの後の話が記されている。兼盛の話で「この日兼盛衣冠を正して陣に参り、終日伺候す。この歌勝つのは聞きや、拝舞して退出し、自余の歌の勝負に至りては執せず」とあり、自分の歌だけに対して執着している様子がうかがえる。また、忠見は貧しそうな外見であったことも記されている。しかし『沙石集』では忠見が歌合で負けてそれが原因で病気になって死んでしまったこと、兼盛が噂を聞き見舞いに行ったことが記されている。では、本当にあったことなのか。田舎に住んでいる忠見の噂を聞くことが出来るのか、自分の歌の勝ち負けにしか興味を示していなかった兼盛が見舞いなどに行くのかは、疑問である。実際の実事は違っていると考えた。

『俊頼髓脳』『袋草紙』『十訓抄』『沙石集』これら4つの長能の話は概ね共通しており、公任に歌を批判されて死んでいるというところだ。自分の歌を理解してもらえない悲しみから死んでいったという話が、長い年月が経つうちに忠見の話と混ざり、負けた悲しみから死んだということにされたのだと考えた。つまり、犯人は、長い年月の間に違う事実にしてしまった人々であろう。

(1)のように、テキストの異同とその原因を追求した生徒が約2割、(2)のように、壬生忠見殺人事件の犯人を『沙石集』無住であると指名した生徒が約半数、(3)のように、犯人の指名ではなく「時代の変化」「テキストを受け継ぐということ」「古典の語り」に言及した生徒が約3割であった。ここに挙げた例の他にも、「筆者が真実を曲げるかもしれないことを承知の上で、筆者の伝えたいことを読み取る練習を2学期に積んできたから」「物語が必ずしも事実ではないこと、また事実ではないからこそのおもしろみも感じられる」などという、テキストを主体化する発想や姿勢も多く見られた。

古典への親しみ方として、中学3年生としては上出来であった。今後も改善を重ねてゆきたい。